

平田徳太郎博士を悼む



昭和35年7月29日午前8時20分平田博士は80才の夭寿を全うして安らかに永眠された。博士は明治37年7月11日東京帝国大学理学部実験物理学科を卒業し、同年8月31日中央气象台技手に就任、初めて気象界の人となり、43年10月1日朝鮮総督府観測所技師となり、間もなく大正4年4月8日には同所長となって大正9年12月23日山林局林業試験場技師に転任するまで朝鮮の気象事業に貢献されたことは人のよく知ることである。桂内閣が明治44年度以降継続事業として開設した第1期治水事業中農商務省所管に属する森林治山、治水関係の調査試験機関であった森林測候所は山林局林業試験場がその業務の指導管理に当たっていたので同場には気象部があった。博士はその主任として栄転されたのであった。丁度その頃、森林測候所は建設予定数39箇所を見たところであったが、森林測候所の在り方について斯界の批判も盛に起り、当局の反省検討も厳しとなりつつあった時であった。かかる際の博士の着任は非常に意味深いものであった。従って博士は就任早々本部は勿論、各森林測候所の

現況を経費設備陳容業務及び所在地方の環況等全般に亘って詳細に視察した上、この機関の使命を慎重に検討して、適確な使命的業務の認識を得ることに努力した。斯くして自から確認した使命を果す為に必要と信ずる業務計画を建て、例えば従来の気象観測規程の改定を行い気候資料調査の為の一般観測は、必要最小限度に止めその余力を森林局所気象或は所在地方特産関係の気象資料の観測調査に向けたこと、動植物季節観察法に就ては各専門家の意見と資料を求めて、それを基礎として新規程を定めたこと等々、着々果敢に所信を実行した。其の間、当局上司に対しては所信を披瀝してその支援を求め、一般関係方面に対しては、この業務の必要性を分り易く説明してその認識を正し、部内職員に対しては常に本業務の使命を良く了解せしめつつ親切に指導して一致協力の体制を採る等細心の配慮を怠らなかつた。例えば森林気象互助会報を発行して意志の疎通を計り技術研究に関する指導並に知識交換機関を設けたことに有効適切であった。爾來この業務は日に月に面目を新にした。

さて昭和3年5月14日には理学博士の学位を授与せられ、同4年5月には欧米各国に出張し、ストックホルムに於ける国際林業試験場会議に出席した時には、わが国の森林治水試験関係の業績をも紹介（欧文報告も持参して行った）した。同8年8月に林業試験場技師を辞任したが、引続き農林省から治水事業に関する調査を囑託されて従来と変る処なく調査研究を続けつつ、該方面の若き研究技術者を常に親切に指導された。また一時昭和14年9月16日から20年11月19日まで文部省の懇請によって名古屋高工の校長に就任して技術学徒の訓練薫陶に尽されたが、同21年5月8日以来再び林業試験場に帰り森林治水試験研究の委嘱に応じて昭和34年3月まで相変らず熱心に森林による治水試験其の他災害防止及び軽減に関する試験に没頭しておられた。博士の数多き業績の具体的事項の枚挙は他に譲ることにするが、朝鮮から内地に帰り血氣盛なる42才頃から心に決する処あって、その後の一生をわが森林治水事業、殊に森林治水試験研究業務の開拓に専念奉仕されて偉大な足績を残されたことは関係各方面の永遠に忘れえぬ処であらう。嗚呼今は再びその声咳に接することは出来なくなった。

(神保 幸雄)